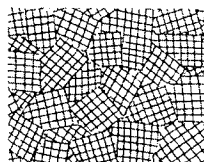


転換期のチリ社会党

その歴史と変容



竹内 恒理

はじめに

東欧・旧ソ連における共産主義体制の崩壊は、いうまでもなく世界的な大事件である。ラテンアメリカの各国においても、社会主義を標榜する諸政党内で、今後の社会主義の方向性をめぐる議論が活発化している。

東欧、旧ソ連の共産主義体制が崩壊する10数年前、すでにチリ社会党の指導者たちが、体制内部の矛盾を目の当たりにしていた事実があったことは特筆に値する。これらチリ社会党の指導者の多くは、1973年の軍事クーデターにより、本国を追われ、東欧・旧ソ連邦に亡命し、そこでそうした矛盾をかいま見たのである。アジェンデ政権の崩壊後、なぜ、「チリ社会主義の実験」が失敗したかについて検証し、新たな社会主義の方向を模索していた彼らは、これら東欧・旧ソ連の実態に失望し、むしろフランス、イタリア、スペインなど西ヨーロッパ諸国の社会主義のあり方に大きな影響を受けた。90年3月、チリでは約17年振りに民主政権が誕生した。国外に追放されていたこれら社会党の指導者たちも帰国し、連合（コンセルタシオン）としてキリスト教民主党とともにこの民主政権に

参加している。

本稿では、まずチリ社会党の歴史の変遷を概観し、アジェンデ政権の崩壊でチリを出国した社会党指導層が、東欧、旧ソ連の社会主義や共産主義に失望し、西欧の社会主義に目を向け、その影響をいかに受け変容したか、また、それが今日の現実の政治にいかに反映されているのかを見てみたい。

1 チリ社会党の成立

チリ社会党の起源は、1932年6月4日、マルマドゥケ・グローベ（Marmaduke Grove）空軍司令官が、クーデターによって「社会主義共和国」（República Socialista）を樹立したことに遡ることができる。このグローベ政権は、わずか12日間という短命に終わったが、1933年4月、五つの政治勢力*1が合同し、チリ社会党（Partido Socialista de Chile）が成立した。社会党が勢力を拡大し得た背景には、1910年代後半からの硝石産業の衰退、20年代の経済不況による労働運動の高まりを挙げることができる。

チリ社会党は、スターリン主義全盛期のソ連共産主義に反対する左派グループによって、チリ共

産党 (PC) に対抗して結成されたものである。結成時から多様な勢力から成り立っていたものの、(1)マルクス主義イデオロギーの標榜、(2)第三インター (コミンテルン) への不参加、(3)階級闘争思想の受容、(4)資本主義体制の打倒、(5)プロレタリアート革命支持、を共通の方針としていた。

社会党は、無政府主義、フリーメイソン、トロツキズムの影響を受け、さらにはホセ・インヘニエロス (José Ingenieros)、ファン・ブストス (Juan Bustos)らラテンアメリカのマルクス主義思想家の影響も受けた。その後、パルーのアプラ党運動、チトー主義、ネルー主義およびナセル主義、カストロ主義からも影響を受けつつ、その性格は、刻々と変化していく。

チリ社会党は、1930年代当時のラテンアメリカの社会主義勢力としては、政治的に影響力を持つ唯一の社会党であった。33年10月、社会党は第1回党大会を開催し、党綱領を採択した。その後の同党の基本方針となる党綱領の主な点は次のとおりである*2。

- (1) 現実を解釈する手段として、科学的に強化されたマルクス主義を受け入れる。
- (2) 資本主義体制は、人間社会を明確な二つの階級に分断した。一つは生産手段を所有し利潤を追求する階級であり、他の一つは労働と生産に従事し、賃金以外に生活の手段を持たない階級である。労働者階級は経済的富を手にしなければならない。有産階級はその特権を保持しようとしており、このような二つの階級の対立は消滅させねばならない。現実に資本家階級は国家を代表しており、この国家こそが労働者階級の抑制の機関となっている。
- (3) 資本主義的生産様式は、土地、生産・商業・金融・輸送手段の私有に基づいており、これらを共有する社会主義的経済体制に変更しな

ければならない。

- (4) 全体制を変革させる過程においては、組織化された労働者による独裁が必要となる。民主的制度を通じての漸進的な変化を期待することは不可能である。支配階級は文民・軍人の団体組織を有しており、それ自身の独裁を打ち立てている。それは、労働者を悲惨な状況にとどめておくためのものであり、労働者の解放を阻止している。
- (5) 「大陸的社会主義共和国」建設のため、反帝国主義を掲げ、ラテンアメリカ人民の経済的、政治的統一を目標とする。

注目すべきは、この当時、社会党は民主的制度による社会主義への移行を不可能ととらえていた点である。

この時チリ社会党とチリ共産党を分けたのは、前者が社会主義を、マルクス主義を採り入れたダイナミックな思想ととらえ、社会闘争の発展により補強、修正すべきものとしたこと、また、労働者階級を工業に従事するプロレタリアートにとどめず、小作農等の労働者を含むものと定義したことである。

チリの選挙史において、チリ社会党の躍進はめざましく、1935年の地方議会選挙では全体で5%の票を獲得した。得票率は37年の国会議員選挙においては11%に増加し、グローベを38年の大統領選挙の候補者とする決定を行っていた。さらに41年の国会議員選挙では社会党は全得票の19%を占めた。しかしこの間36年には、チリ共産党の中のトロツキズムを信奉する一派が、共産党を離れ社会党に合流している。

1938年、社会党は急進党のペドロ・アギレ・セルダ (Pedro Aguirre Cerda)率いる人民戦線 (Frente Popular) の結成に参加し、サルバドル・アジェンデ (Salvador Allende) らの社会主義者たちは閣

僚として入閣した。この時、チリ社会党は政権に加わったが、また同時に分裂も経験した。まずリカルド・ラチマン(Ricardo Latchman)、アマロ・カストロ(Amaro Castro)によって率いられた一派が、社会主義連盟(Unión Socialista)を結成したのである。この社会主義連盟は、後にチリ共産党に統合される。

さらにアギレ政権内で、社会主義者が政府に協力することに対し、党内では不満を持つグループが形成された。このグループは、「造反主義者」(Inconformistas)と呼ばれ、無政府主義、トロツキズムを標榜したセサル・ゴドイ(César Godoy)がその中心人物であった。ゴドイは富裕者から成る政府に、デカダンの社会主義者が参加していることを批判した。この時社会党内には、自らをペルーのアプラ党が主張するようさまざまな階級からなる改良主義的勢力と位置づけるか、あるいは工業労働者からなる革命的勢力と位置づけるかについて論争が起こった。1940年、後者のゴドイらは社会党を追放され、「造反主義者」派は労働者社会党(Partido Socialista de Trabajadores)を結成し、後にチリ共産党に合流した。社会党は40年、人民戦線と訣別するが、政権に参加したことでブルジョワ階級と癒着していると見なされ、この時期、左派の中での勢力を失いつつあった。一方、チリ共産党は、巻き返し政策により左派勢力にその組織を拡大していった。

* 1 5団体とは、社会主義革命行動(Acción Revolucionaria Socialista)、社会主義秩序(Orden Socialista)、マルクス主義社会党(Socialista Marxista)、統一社会党(Socialista Unificado)、大衆新運動(Nueva Acción Pública)である。

* 2 Briones, Alvaro ; Eduardo Ortiz, *Una visión de la evolución del pensamiento socialista en Chile*, Santiago, OPCINONES, 1985, p. 169.

2 「労働者民主共和国」綱領

1941年、アギレ大統領が死去すると、チリ社会党幹部会は、急進党(Partido Radical)のファン・アントニオ・リオス(Juan Antonio Ríos)大統領候補の支持を決定した。リオスは当選を果たし、社会党は再び政権に参加したが、このため同党内部には新たな論争が発生した。

1943年、ランカグアにおいて第9回社会党大会が開催され急進党の右傾化が非難され、また、そこで相反する二つの立場が表明されたのである。

グローベにより率いられたグループは、政府との協力関係を保ち続ける方針を表明したのに対し、フリオ・セサル・ホベット(Julio César Jobet)の率いるグループは、無能な政府への協力はやめるべきであると主張する。両者の意見を調整するために第4回臨時党大会が開催されたが、グローベ派とホベット派の妥協点は得られず、ホベット派は党から分離し真正社会党(Partido Socialista Auténtico)を結成した。この真正社会党は、46年にチリ共産党に吸収されることになる。

1946年から55年までの社会党を特徴づけたのは、分裂と選挙での低い得票率であった。社会党の分裂は40年代後半さらに顕著となり、党内には新イデオロギー論争がまき起こった。47年、社会党の新たな指導者として登場したラウル・アンプエロ(Raúl Ampuero)党中央委員会委員長は、党綱領に関する全国会議を招集した。新たな綱領は、後のチリ大学長となるエウヘニオ・ゴンサレス(Eugenio Gonzales)書記長により起草された。ゴンサレスは、それまで理論的に曖昧であった社会党綱領の理論づけを行なった。この新方針は、社会主義とヒューマニズムとの関連づけを行なったこと、正統的

マルキシズムと一線を画するとしたこと、また社会民主主義的改良主義とも袂を分かつことを明確にした点で、その後のチリ社会党の方向に決定的な意味を与えた。

この1947年の党会議では、具体的には以下の点が採択された*3。

- (1) 社会主義ドクトリンは教条的なものではなく、生きた、本質的にダイナミックな概念である。
- (2) 資本主義は、社会発展にとり有益なものではなくなっており、共存と労働、至上の人間の価値にとり障害となっている。
- (3) 資本主義は、人間性を否定することにより強化されてきたため、その存続は文化の存続を脅かすものである。
- (4) 社会主義を選択することは、単に経済的な問題というよりも、人間性の発展が今後、継続されるということを選択することである。
- (5) 労働者による革命的行動と労働組織の活動が、人間の運命を確実なものとする。
- (6) 社会主義の目標は、ブルジョアの秩序の中で達成されたものを破壊することではなく、それを超越するところまで発展し、かつ物質的福利が全体に広がることによって、自由と社会正義が達成されるところにある。
- (7) ソビエト的革命によって達成された社会を拒否する。また、マルクス主義的なあらゆる政策を否定する。ソビエト社会は労働者階級に奴隷制を強いる専横的な官僚機構に率いられ、かつ単純な国営化過程にある初期の社会主義的体制にすぎない。
- (8) 革命的な社会主義政権は、人間の欲求を満足させるため、計画された経済体制を基盤とする。また、その経済の社会主義化は、各国の状況に応じて調整される。

(9) 労働者の創造的な発意を不毛のものとする官僚主義的中央集権化は、避けなければならない。

(10) 人民政府は「労働者民主共和国」として、社会主義的な政治要件と道徳律を備えるべきである。

* 3 Friedmann, Reinhard, *La política chilena de la A a la Z : 1964-1988*, Santiago, Melquiades, 1988, pp.134-135.

3 分裂と急進化

新綱領の採択にもかかわらず、社会党はさらに分裂をきたした。

その主な原因は、1948年、ゴンサレス・ビデラ (González Videla) 政権が発表した「民主主義防衛法」(*Ley de Defensa de la Democracia*) によるものであった。この「民主主義防衛法」の発布は、各政党に、共産党の非合法化に賛成か否かの選択を迫った。社会党は伝統的にアンチ・コミニズムであったが、同党内部でこの法律を支持するか否かで対立が起こり、その結果、社会党から法律を支持した勢力が人民社会党 (*Partido Socialista Popular*) として分裂した。

1951年、社会党は「人民の戦線」(*Frente del Pueblo*) と呼ばれる共産党 (非合法) との連合戦線を結成した。これに対して、人民社会党 (*PSP*) はイバニェス (*Ibañes*) 大統領の率いる人民同盟 (*Alianza Popular*) に参加した。

しかし1953年から57年にかけて社会党をはじめとする左派勢力は、革命を通じた社会主義政権の樹立を共通の目標とすることで一つにまとまる方向を取り始め、57年には社会党と人民社会党は再統一された。また56年には、社会党勢力は共産党

と、人民行動戦線 (*Frente de Acción Popular : FRAP*) を結成した。58年の大統領選挙で、*FRAP* は、サルバドール・アジェンデを大統領候補に擁立したが、右派が立てたホルヘ・アレッサンドリ (*Jorge Alessandri*) にわずか2%の差で敗北を喫した。

大統領選挙の敗北とキューバにおけるカストロの革命の成功は、チリの左翼勢力に大きな活力を与え、社会党は1960年代および70年代の初めにレーニン主義に基づく急進化の道をたどることとなる*4。

社会党内では「民族解放軍」(*Ejército de Liberación Nacional*) が結成された。「民族解放軍」は同党の急進化に重要な意味を持ち、また同軍がボリビアにおけるチェ・ゲバラ (*Che Guevara*) のゲリラ戦に参加したことは、特筆すべきである。それに従い、社会党内ではトロツキズムが排除され、ゲバラ派が台頭した。

1969年チリ社会党は、共産党(*PC*)、急進党(*PR*)、統一人民行動運動(*MAPU*)、独立人民行動(*API*)、民主社会党(*PSD*) とともに人民連合 (*Unidad Popular*) を結成した。人民連合はアジェンデを大統領候補に擁立し、70年9月4日、アジェンデは大統領に当選した。

* 4 1967年の第17回党大会では次のような文言が決議に盛り込まれている。「マルクス・レーニン主義の組織として、チリ社会党は服従からチリを解放する革命的國家建設のため政権の獲得を目標とする。平和的合法的手段によって、政権を獲得することは不可能である。社会党はこうした手段に限界を見出し、武器を手にし闘うに至った」。

4 人民連合時代

アジェンデは社会主義者であり、その理論を実

践に移した人物である。彼は、人間性を中心とする新たな国家・経済・社会モデルを社会主義を通じて実現させることを唱えた。しかし、チリ社会党の主流の考えは、アジェンデのそれとかならずしも一致するものではなかった。

1972年、ラ・セレナ (*La Serena*) において開催された第18回党大会において、より急進的な勢力が多数派を占め、アニセト・ロドリゲス (*Aniceto Rodríguez*) の穏健派が放逐された。急進派と穏健派の対立は、アジェンデの任命した各政策担当者間の抗争となって現われた。アジェンデは、穏健派に属し民主主義的な人民革命を目指した。穏健派は、労働者階級が既存の寡頭的・封建的・帝国主義的状况を超越するためには、他の階級と同盟を組まなければならないと主張した。そして、そのような階級同盟の先頭に、プロレタリアートが立つべきであると主張した。

これに対し、急進派は人民革命は容易であり、社会主義者の手で行なわれるべきものと考えていた。そして、穏健派が提唱するような階級間同盟は、社会主義体制の建設に反するものであり、革命達成は選挙によらず、暴力によるべきであると主張した。この主張は、1967年にチジャン (*Chillán*) で行なわれた社会党大会で採択された労働者戦線 (*Frente de Trabajadores*) の考え方が基盤となっていた。

5 社会党受難の時代

1973年9月11日のクーデターの結果成立した軍事政権下において、チリ社会党は、その歴史始まって以来の困難な時代に直面した。すなわち、初めて社会主義が憲法に反する存在とされたからである。社会党は、結成されてから73年までの約40

年の歴史のうち、10年間は与党勢力として、また残りの30年間は野党勢力として、活動をしてきた。アレックスドリ大統領の第二次政権（1932～38年）下において弾圧され、マルマドゥケ・グローベ、オスカル・シュナケ（Oscar Schnake）らの幹部が投獄されたり、57年に成立したイバニェス政権下でも社会主義者に対する迫害はあったが、そうした時でもチリ社会党は合法的に活動を許されていた。

軍事クーデターによりアジェンデ大統領、ホセ・トア副大統領は死亡し、またオルランド・レテリエール外相が暗殺されるなど、多くの指導者が死亡あるいは国外に逃れた。また、カルロス・アルタミラーノ書記長は国立競技場に連行されたが、ここを脱出し、国外に逃れた。他の幹部の多くも投獄かあるいは国外追放措置を受けた*5。

1973年から79年にかけて、チリ社会党本部の活動とは別に、さまざまな社会主義者の小集団の活動が見られた。そのなかで74年から75年にかけて「州国民調整」と呼ばれる州レベルでの組織の活動が顕著であった。その他「ラ・チスバ派」（後にアルメイダ派に合流）、「合意派」（後に歴史派を結成）、「人道社会主義派」、「回復運動派」などがあった。「人道社会主義派」および「回復運動派」の二つは後に合流し、社会党ブリオネス派（後にヌニェス派さらにはアラテ派と改名）となった。また、ベネズエラに国外追放されていたアニセト・ロドリゲス（元社会党書記長）、マヌエル・マンドハーンもそれぞれ独自に社会主義グループを結成した。この間、東ベルリンに存在するアルタミラーノ書記長からチリ国内の党活動に対し指令が発せられ、78年、アルゲル（Argel）において開催された党大会において、チリ国外の社会党幹部と国内活動家の話し合いがもたれた。そこでアルタミラーノが書記長に再選され、国外の中央委員のメンバー9名が改選

された。しかし、1年後の79年、アルタミラーノとクロドリコ・アルメイダ（元副大統領）との間で論争が起こり、社会党はここに二つに分裂する。

*5 *Arrate, Jorge ; Paulo Hidalgo, Pasión y razón del socialismo chileno*, Santiago, Las Ediciones del Ornitorrinco, 1989, pp.85-88.

6 アルメイダ派とアルタミラーノ派

社会党アルメイダ派は古典的なマルクス・レーニン主義への回帰を唱え、プロレタリアートによる闘争の先頭に立たねばならないと唱えた。そして、アジェンデ政権の崩壊は、国家が労働者階級の真の重要性を認識していなかったために起こったと説明し、労働者階級との幅広い同盟が行なわれるべきであったと主張した。このような考え方に基づきアルメイダ派は、政治的動員に参加する方向を打ち出し、1983年から活発となった反政府抗議運動に加わった。同派は他の左派勢力との同盟政策を進め、83年には、民主同盟（Alianza Democrática、後にかつての人民連合に所属した左派勢力を中心に結成された人民民主主義（MDP）となる）に加わり、また共産党とともに「統一左派」を結成した。アルメイダ派は「統一左派」のメンバーとして活動を続ける一方、87年より、より実践的な方法に路線を変更していった。つまり他の反対政府勢力と足並みを揃え、ピノチェット体制側が用意した枠組みを用いて、政治闘争を行なう方向を選択した。それは、ピノチェット政権が将来の政党政治復活のために用意した政党法に基づき、政治に参加するという方向であり、88年11月より政党登録のための署名集めを行ない、89年に共産党ら極左勢力とともに「拡大左派社会主義党」（PAIS）を結成した。

一方、アルタミラーノ派は、同派の勢力挽回のため、1970年代にキリスト教民主党から分離した社会主義を信奉するグループと手を組んだが、国内においてはアルメイダ派が多数を占めていたため勢力の急速な拡大は得られなかった。そうした中で81年9月に社会主義諸グループの間で「常設連絡委員会」(Comité de Enlace Permanente)が結成された。83年に同委員会は「統一政治委員会」(Comité Político de Unidad)と名称を変更したが、この「統一委員会」には、フランスで開催されたアルタミラーノ派大会で書記長に任命されたりカルド・ヌニェスに率いられたアルタミラーノ派、アルメイダ派の一部、「合意派」、また79年の分裂の際に、中立を表明した「スイス派」、「人民社会主義同盟」、「人道主義派」が参加した。その後、同委員会はチリ社会党(Partido Socialista de Chile)と名称を変えた。

1985年社会党ヌニェス派は民主同盟(Alianza Democrática)に参加し、その後、政府側が用意した有権者登録に国民が登録するよう呼びかけ、自由選挙の実施を唱えた。87年末に、ヌニェス派は社会党歴史派、一部の左派グループ、一部の無所属派とともに「民主主義のための政党」(Partido por la Democracia)を結成し、代表にリカルド・ラゴスを選出し、政党としての登録を行なうことを決定する。

一方、古くからの社会党の指導者であるアニセト・ロドリゲス、およびラウル・アンブレロは、1979年以来の社会党の大分裂状況を收拾し、統一を行なうことを画策、84年ローマにおいてアルタミラーノと会談し、将来社会党が統一されることを約束する協定書に署名した。さらに、87年には、アルメイダ、ヌニェス、ロドリゲスの三者間で統一社会党の構想についての合意が得られた*6。

1989年12月末、アルメイダ派とアラテ派(ヌニェ

スに代わりホルヘ・アラテが代表に選出されたため名称を変更)および社会党の分派である「統一人民行動」の間で社会党統一に関する合意書に署名が行なわれ、10年振りに社会党は統一された。

*6 Arrate ; Hidalgo, 前提書, 91~96ページ。

7 チリ社会党の変容

社会党は、1973年以降、東西ヨーロッパ各国の社会主義と接触を持ち、その影響を受けた。社会党指導層は、軍事クーデターにより、国外に逃れ、あるいは国外追放となり、東欧、旧ソ連、あるいは西欧の国々に在住することとなった。

1970年代の半ばから80年代にかけて東欧・ソ連で生活したチリ社会党の指導者たちにとって、それは、現実の共産主義体制に触れ、またそれらが崩壊する過程をつぶさに観察する契機となった。このことは、特に、社会主義体制における民主主義についてのチリ社会党の目指すべき方向に大きな影響を与えることとなる。

これらチリ社会党の指導者のうちには、東欧、旧ソ連に暫く留まった後に、フランス、スペイン、イタリア等に移り住む者もいた。それまでの社会党は、こうした西欧型の社会主義政権、あるいは社会党、共産党のありかたを「改良主義」と見なす傾向があった。しかし、東欧・ソ連で見た社会・共産党独裁体制に比べ、西欧の民主主義的な要素をとり入れた社会主義のありかたは、これらチリ社会党の指導層にとり大きな魅力と映った。ちょうど、西ヨーロッパの左派勢力の内部では、次の三つの局面が進行していた。一つは、エンリコ・ベルリンゲールに代表されるユーロ・コミュニズムの出現、さらにはアントニオ・グラムシの理論の影響を受けたイタリア共産党の活発化、そして

三つめには、フランス、スペインにおけるミッテラン、ゴンサレス政権の出現であった*7。

1970年に成立したアジェンデ社会主義政権下での社会党内部では、キューバ、ソ連との関係緊密化により急進化が進行した。アジェンデ自身は、チリ独自の方式による穏健派路線を目指したが、政府内部の急進派との抗争が激化する中で、アジェンデ政権は、途中で挫折し、崩壊に至る。アジェンデは、「チリ人民による独自性」をふまえた社会主義をめざし、民主主義 (democracia)、多元主義 (pluralismo)、自由 (libertad) をそなえた社会主義の建設を目指した。

1973年9月の軍事クーデターと、その後の独裁体制は社会党にかつてない衝撃を与え、その後、社会党の方針を根底から見直す契機となった。チリを離れ、東欧、旧ソ連、あるいは西欧各国に逃れたこれら社会党のリーダーたちは、東欧・旧ソ連での現実の社会・共産主義体制の矛盾を観察する中で、フランス、スペインあるいはイタリアにおける社会主義、共産主義に目を向けていったのである。

イタリアに在住したこれらのチリ人社会党グループは、チリのキリスト教民主党の亡命者グループとともに雑誌『チレ・アメリカ』(Chile-América)を発行し、社会党の革新のプロセスについて議論を行なった。

革新に向けた議論の中心テーマは、社会主義と民主主義との関係についてであった。つまり、東欧、ソ連邦における社会主義がなぜ権威主義化したのか、またなぜアジェンデ政権が崩壊し、その後権威主義的軍事体制が出現したのかについての議論が闘わされたのである。そして、それまでは「改良主義」として否定していた西欧各国の社会主義、共産主義のうちに民主主義の要素が取り入れられ共存しているありかたこそが、チリ社会

党のめざす社会主義に吸収されるべきであるとの結論に達したのである。

社会党の変容の過程をたどると、まず、1980年にチリ社会党がとりまとめた公式文書 (Convergencia socialista : fundamentos de una propuesta) によれば、「理論的・文化的流れを常に追求し、また創造的、開かれた批判的マルクス主義 (Marxismo crítico) を取り入れる。教条的な操作、革命という内容を凍結する」としている。これは、チリ社会党が33年に結成された時に出された「原則宣言」さらには、レーニン主義化が顕著となる60年代末の方針と比較するとその変容ぶりが明らかとなる*8。

また、1983年9月に行なわれたチリ社会党の第2回チャンティリ (Chantilly) 会合の最終議事録にはマルクス主義との関係が次のように言及されている。(1)社会主義的、民主主義的プロジェクトを推進するためには、必ずしもマルクス主義と一線を画する必要はなく、マルクス主義の欠陥、誤謬、不十分さを認めることを妨げない。(2)だが、必要とあらば、マルクス主義を神聖化せず、またそれと訣別することも可能である。同会合での最大の注目点は、「マルクス主義と訣別することも可能」という点である。

さらに、ホルヘ・アラテ・チリ社会党書記長は、1987年に「革新社会主義」について次のように述べている。「政治体制としての社会主義の選択は、民主主義のための選択である。すべての社会主義が民主主義体制とは限らない。現実の社会主義は、権威主義的社会主義の存在を示している」。

1989年の6月、コスタ・アスル (Costa Azul) における第15回社会党大会において社会主義の基盤としての民主主義体制につき、次の文言が採択された。

「完全で、多元的、かつ参加的な民主主義。そこではすべての権利が尊重され、自由な表現

と、政党・大衆組織、市民団体グループの自由な活動を伴う公開の討論が政治生活の軸とされる。また、人民の意志が報道を通じて自由に表明され、それが効果的かつ平和的に政権に反映される。多数派が統治するが、少数派も尊重され、少数派はその権利をすべて行使できる。また、人民には政権交代の選択が与えられる」*9。

* 7 Walker, Ignacio, *Socialismo y democracia*, Santiago, CIEPLAN-HACHETTE, 1990, pp. 181-182.

* 8 同上書 202ページ。

* 9 同上書 213～214ページ。

おわりに

1990年3月に発足したエイルウィン政権は、キリスト教民主党、社会党、急進党などの連合政権であり、社会党はキリスト教民主党に次ぐ、第2勢力となっている。社会党は、急進的なアルメイダ派系と穏健なアルタミラーノ派系に分けられるが、本稿を通じたテーマである「革新化」がより進んでいるのは、後者の系列であると考えられる。

後者は、アジェンダ流社会主義を受け継いでいるが、その中でも「民主主義のための政党」(PPD)に属するグループは、東西冷戦の崩壊という世界の変化に敏感に対応し、その革新プロセスを進めているように見受けられる。

PPDは、(1)民主的な国家、社会の実現、(2)人権の尊重、(3)国際社会への復帰、(4)民主的文化の育成、などをその綱領としている*10。

特に経済政策についていえば、国家のある程度の介入をもとに、市場原理に基づく経済を積極的に推進する姿勢を見せているのが特徴である。

社会党の革新プロセスはいまだ完成されたものではないが、かなりの柔軟性を持ちながら現実に対応していくものと見られる。ただし、現在の社会党は方針を異にする寄り合い所帯的な状況にあると見られるので、今後、革新派と伝統派に分裂する可能性も否定できないであろう。

*10 *¿Qué es el PPD?*, Santiago, Ediciones ATANOR, 1989, pp.59-107.

〔付記〕 本稿は、所属機関を代表するものではなく、あくまでも筆者の個人的見解である。

(たけうち・わたり/外務省国際機構課)